

川瀬一馬君著「古活字版之研究」に對する授賞審査要旨

本書は、本編及び附圖の二冊より成る、本編は四六倍版約八百八十頁の大冊にして、第一編「近世以前に於ける我が印刷文化」第二編「活字印刷術の傳來並びに其の發達」の二編に大別せらる、第一編は本書の序論として、我國古代の印刷史を述べたるものにして、之を五章に分ち、第一章序説に於ては、我が印刷文化の發展と時期の區分を論じ、支那の印刷文化との關係、並びに我が印刷文化の特質について説述し、活字印刷術の傳來に及び、第二章より第五章に於ては、上代より中世に至る印刷文化として、奈良時代における陀羅尼の摺寫、平安時代における摺經より、鎌倉室町時代前後における奈良、高野、醍醐、叡山、其他京洛地方における刊經、五山版、外典の翻刻、國書の刊行、並びに地方における印刷文化の開發を説明せり。

第二編は本論として、著者の主力を盡せるものにして、専ら近世初期に於ける活字印刷術の傳來、並びに其發達を説き、之を十章に分ち、先づ歐洲活字印刷の傳來と、朝鮮活字印刷との傳來を述べ、次に爲政者の活字開版として、勅版官版の事實を挙げ、寺院に於ける活字開版として京都に於て要法寺以下十二ヶ寺、地方に於て叡山以下七ヶ所における寺院の活字開版の事蹟を詳述し、次に坊刻活字本の發達として、醫書、佛書、漢籍、國書の活字印本について、委曲を盡せり、而して終に江戸時代

後期に於ける活字印刷術の衰退を論じ、更に近世初期に於ける活字印刷の技術と活字の種類に及び、尙附録として、古活字版研究小史、古活字版刊記集、古活字版五十音別書目、並びに索引を載せたり、附圖は四六倍版二百頁、圖版大小六百餘を收む。

以上を本書内容の梗概とす、今之を通覽するに、第一編は、日本古代印刷文化史として、よくその要を撮り、中に従來の通説を訂したるものあり、従來世に出でたるこの種の著作に比して資料の確實と豊富なることに於て、遙に勝れたり。

第二編は、その詳密該博なることに於て、まさに我國書誌學界における劃期的のものといふべし、その中、また新事實の發見少からず、慶長勅版に中臣祓一帖の含まれたること、慶長元和の間に、伏見宮版として、職原抄の印行せられたることの如き、本書によりて初めて紹介せられたるものなり、また慶長年間京都要法寺版についての調査の周到なる、嵯峨本の研究の特に詳密なるも亦本書の特長とす、更に活字の異同を詳細に調査し、無刊紀本の年代を推定せるが如き、亦本書に於て稱揚すべき點なりとす。

固より本書の性質上、その編成後に新たに材料の出現せるものありて他日の増補に俟つべきものあるべしと雖も、著者が全國の圖書館及び藏書家を遍歴して、資料を採訪蒐録し、之を大成せる功績は顯著なるものあり、之によりて、本邦文化史研究に貢獻する所僅少ならざるを見るべく、著者が努力

の尋常ならざるものありしは十分之を認めざるべからず。